

現代語「ばかり」の用法の多様性について

一名詞(句) + 「ばかり」を中心に

朱琳 (名古屋大学大学院)

要旨

本稿は、現代語「ばかり」が名詞(句)に接続する場合の用法について、詳細に記述・分析した。

本稿では、「スキヤニング考察」という概念を用い、スキヤニング考察の結果と過程に注目する。そして、従来の「とりたて」「程度」「アスペクト的用法」の三つに分類する方法を避け、名詞(句)に後接する「ばかり」の用法を新たに分類した。その結果、名詞(句)に後接する「ばかり」の基本的な用法を、複数性明示用法、数量指示用法とした。それ以外に派生的な用法の「ばかりか」の用法を位置づけた。また、各用法の相違と連続性を明らかにした。さらに、文のどの成分として用いられるかによって、「ばかり」の用法の偏りが見えたので、日本語学習者が「ばかり」を使用する時に、その用法の偏りが参考になると思われる。

1. はじめに

現代日本語の助詞「ばかり」には多様な意味や用法がある。構文上では、名詞、動詞、形容詞、副詞、助詞など多種類の成分と共起でき、その表す意味も、限定、比況、程度など多岐に渡っている。このような煩雑な用法の中で、例(1):「雨ばかり降る」のように日本語学習者がごく初級で学習する用法もあれば、例(2):「割れんばかりの拍手」のような上級表現として教わる用法もある。

また、「ばかり」の諸用法についての先行研究の蓄積は大きいですが、その分類方法や分析対象とする範囲などは異なっている。先行研究をまとめてみると、「ばかり」の用法はとりたて用法(例(1):雨ばかり降る)、アスペクト的用法(例(3):引越してきたばかりだ)、程度用法(例(4):リンゴを三つばかり買う)の三つに大別することができる。しかし、その三つの用法の境界や連続性は明確とは言えない。また、この三つの用法を個別に研究したものが多い。とりたて用法とアスペクト的用法、とりたて用法と程度用法をそれぞれ合わせて研究したものはあるが、三つの用法を一括して扱った研究はごくまれである。管見の限り、沼田(2000)(2009)だけである。しかし、沼田でも言及するにとどまり、詳しく研究されていない。さらに、「ばかり」には「ばかりに」「ばかりか」など派生的な用法が多い。これらの用法と「ばかり」本来の用法の関連などもまだ明らかではない。筆者は、「ばかり」の三つの用法及び諸派生的用法を一括して見ることにする。「ばかり」のあらゆる用法を新しく分類したいと考えている。そのため、「ばかり」があらゆる品詞に後接する場合の用法をそれぞれ詳しく分析し、記述説明する。朱(2013)では、「ばかり」が動詞(句)に後接する場合の用法を中心に見たが、本稿では、引き続き「ばかり」が名詞(句)に後接する場合の用法を中心にすることにする。

2. 研究方法

数多くの先行研究の中で、様々な研究方法が用いられている。その中で、定延(2001)では

認知的な情報処理として探索¹を提示しており、「ばかり」による探索はスキニング探索²であると指摘している。この議論は「ばかり」の本質的な機能を指摘したものだと言える。しかし、定延（2001）は、「ばかり」のいわゆるとりたて用法についてしか言及していない。また、澤田（2007）は定延（2001）の探索の定義と同じ立場をとり、走査³という概念を使用し、「ばかり」のいわゆるアスペクト的用法について説明している。しかし、澤田（2007）は、「ばかり」のいわゆるアスペクト的用法についてしか言及していない。したがって、本稿では、「スキニング考察」という概念を使用し、定延（2001）と澤田（2007）と同じ立場をとり、一用法にとどまらず「ばかり」のあらゆる用法について分析する。

まず、「スキニング考察」という概念を使用するには、その前提として「集合」（庵 2001、定延 2001、張 2011 など）という概念を導入しなければならない。例えば、文「みかんばかり食べる」は、食べる対象が「みかん」に限られ、ほか（例えば「りんご」「バナナ」）はないということを表す。つまり、食べられる候補が集合（みかん、りんご、バナナなどを含む）を成して想定されている。食べられる候補の集合のなかで、「みかん」は何回もとりたてられ、「りんご」「バナナ」はとりたてられていない。このように、「みかん」は「ばかり」がとりたてる対象である。これを「スキニング考察の対象」と呼ぶことにする。また、何を食べるか？という質問に対する答えの集合（中には「みかん」「りんご」「バナナ」などがある）を「スキニング考察の領域」と呼ぶことにする。さらに、「りんご」「バナナ」などは「ほかの要素」⁴と呼ぶ。

本稿では、「スキニング考察」を以下のように定義する。

スキニング考察とは、集合の中の要素を、一つずつ（そして場合によっては何回も）すばやくとらえていく方式の考察である。

また、上記の例文「みかんばかり食べる」で行ったように、「スキニング考察」を行うためには、まず課題⁵「何を食べるか？」を提示し、それから「みかん」「りんご」「バナナ」などを含む「スキニング考察の領域」についてスキニング考察を行う。つまり、まず例文について課題を提示し、その後スキニング考察を行うわけである。また、発話時、スキニング考察は話し手や聞き手により、無意識に行われている。本稿では、この瞬時に複数回行われて

¹定延（2001）では、「探索とは既知領域の拡大行動である。典型例を言えば、未知の空間がどんな様子なのか調べることである」（p.118）と定義している。

²定延（2001）では、探索は「全体的探索とスキニング探索に二分される」とし、「スキニング探索とはスキニングを用いる探索である。スキニングとは、全体を一挙にとらえるのではなく、一度に一部分ずつとらえていく方式の行動である」（p.120）としている。また、定延（2000）では、以下のように述べられている。「スキニングとは…集合を1要素ずつ粗くすばやく観察し、その1要素について必要な情報を得、それに基づいてその要素に属性を付与して次の要素に移るという一連の心身行動である」（p.258）。

³澤田（2007）では、「連続走査」を「時間概念を状態の連続の中に組み込むこと、つまり展開された状態の連続を時間順で追っていくこと」と定義している。また、自身の説を「基本的に定延（2001）の立場をとるものである」（p.134）としている。

⁴張（2011）でも、同じ「ほかの要素」という言葉を使用しているが、張（2011）で使用している「集合」は「だけ」の上接する語句の成す集合である。「ほかの要素」はその集合の中の「対象要素」以外のものである。それに対し、本稿で用いる「ほかの要素」は「スキニング考察の対象集合」にある、「スキニング考察の対象」以外のものであり、張（2011）とは定義が異なる。

⁵定延（2001）では、「探索課題」（p.119）としているが、本稿では「課題」と呼ぶことにする。

いるスキヤニング考察の過程を詳しく分析し、名詞に後接する「ばかり」の用法を記述説明する。

さらに、本稿では、名詞に後接する「ばかり」の用法を新しく分類し、各用法間の違いや連続性を探りたい。また、どのような条件下で「ばかり」の各用法が実現されるかという基準を探り、最終的に日本語学習者が「ばかり」を使う時の参考になればよいと考えている。

3. 考察

用例は『新潮文庫 100 冊』CD-ROM 版を使用する。

「ばかり」の全用例中、「名詞（句）＋ばかり」の用例が数多く見られる。「ばかり」が名詞（句）に後接するので、文中では、主語や述語成分、また、連体修飾成分や連用修飾成分をなすことができる。

また、「ばかり」が名詞に後接する例文を考察するので、以下のような「ばかり」は考察対象から除外される。

- アスペクト的用法：

(5) 長官は愕然、死なれちゃ困る。元も子もなくなる。復讐は、いま始まったばかりではないか。(井上ひさし『ブンとフン』)

(6) この地獄からのがれるための最後の手段、これが失敗したら、あとはもう首をくくるばかりだ。(太宰治『人間失格』)

- 比況の用法：

(7) すると、学校へ行ってくれるなら、もうどんなことでも、と泣かんばかりであった。(曾野綾子『太郎物語』)

- 高程度指示用法（朱 2013）：

(8) 鴨居に届くばかりの巨体も、薄く髭の生えた童顔も、張った肩も二カ月前と変らない。(渡辺淳一『花埋み』)

(9) 帯にさした半月刀は、眼もまばゆいばかりの黄金でつくられていた。(塩野七生『コンスタンティノーブルの陥落』)

「名詞（句）＋ばかり」について、「ばかり」の用法はいくつかに分けられる。以下「ばかり」の用法ごとに考察していく。

3.1 複数性明示用法

「名詞（句）＋ばかり」の「ばかり」が複数性明示用法で使われる場合、以下のような用例が見られる。

(10) 貴僧、申せば何でも出来ましようと思えますけれども、この人の病ばかりはお医者の手でもあの水でも復りませなんだ。(泉鏡花『高野聖』)

(11) 尼さんばかりが寄って、幾月も雪のなかでなにをしてるんだろうね。(川端康成『雪国』)

(12) いくら拜まれましたも、こればかりはどうしようもありませんわ。(田辺聖子『新源氏物語』)

(13) それに、君たちの選んだ画は描かされた画ばかりで、ちっとも子供の現実がでていないじゃないか。(開高健『裸の王様』)

(14) もっとも、川というのは名ばかりで、それはゴミとドブ泥のあいだを、汚水がかれがれに流れている大きなドブのようなものだったから、誰にしても、その中に足を踏み入れる気にはなれなかった。(山本有三『路傍の石』)

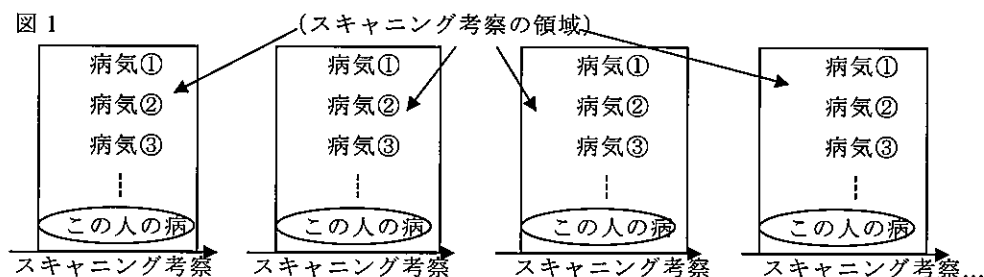
(15) それはなぜだったろう。僕に残るのは空しい疑問ばかりだ。(福永武彦『草の花』)

(16) みんな生きのいい若者ばかりである。(五木寛之『風に吹かれて』)

(17) 石ばかりの小さな中庭は雨水に溢れ、水は石から石へ黒いつややかな背を見せて伝わっている。(三島由紀夫『金閣寺』)

(18) 石と砂ばかりのこの島にも、飛行場のわきに土壌があった。(北杜夫『楡家の人びと』)

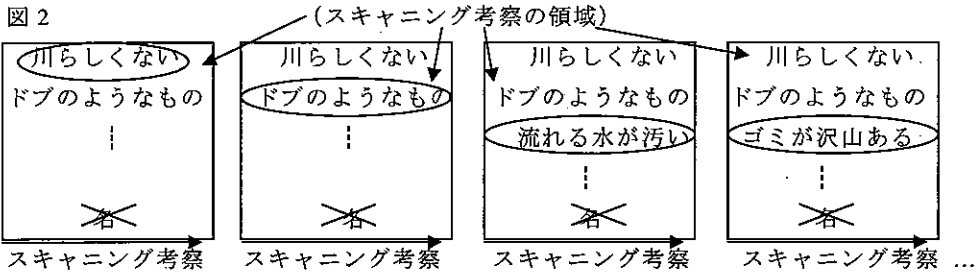
例(10)では、「ばかり」のスキヤニング考察の対象は「この人の病」で、スキヤニング考察の領域には、「この人の病」以外に、例えば「病気①、病気②」などがある。医者Aの手で治らない病気は何か?という課題に対し、スキヤニング考察をしたら、結果は「この人の病」と、例えば「病気①」である。医者Bの手で治らない病気は何か?という課題に対し、スキヤニング考察をしたら、結果は「この人の病」と、例えば「病気②」である。医者Cの手で治らない病気は何か?という課題に対し、スキヤニング考察をしたら、結果は「この人の病」と、例えば「病気③」である。スキヤニング考察を何回もした結果、医者の手で治らない病気は何か?という課題に対し、「この人の病」にたどり着く。また、あの水で治らない病気は何か?という課題に対し、スキヤニング考察をしたら、結果は「この人の病」と、例えば「病気④」である。つまり、医者の手でもあの水でも治らない病気は何か?という課題に対し、何回もスキヤニング考察をした結果、「この人の病」にたどり着く。よって、スキヤニング考察が複数回かつ最大限行われ、たどり着いた結果はスキヤニング考察の対象である。以下のように表示できる。



例(11)では、「ばかり」のスキヤニング考察の対象は「尼さん」で、スキヤニング考察の領域には、「尼さん」以外に、例えば「近所の人」などである。集まっている人はどんな人か?という課題に対し、集まっている人に対し一人一人スキヤニング考察をしたら、「この人は尼さんだ」「この人も尼さんだ」「この人もまた尼さんだ」という結果にたどり着く。例(12)(13)(15)～(18)も同じである。スキヤニング考察が複数回行われ、たどり着いた結果はすべてスキヤニング考察の対象である。

例(14)では、「ばかり」のスキヤニング考察の対象は「名」である。その川はどんな川か?

という課題に対し、一回スキヤニング考察をしたら、結果は、その川は川らしくなく、大きなドブのようなもので、唯一川というものにふさわしいものは名である。視点を変えてもう一回スキヤニング考察をしたら、結果は同じである。何回スキヤニング考察しても、結果は同じである。つまり、複数回スキヤニング考察をした結果、「名」はすべてとりたてられていない。また、「ばかり」が「名」に後接するのは、複数回スキヤニング考察をしたすべての結果に共通するのが「名」だからである。以下のように表示できる。



例(10)～(18)のような「ばかり」の用法は、従来、とりたて用法と呼ばれている。しかし、例(10)～(18)を見てみると、「ばかり」は、スキヤニング考察の対象をとりたてているというより、最大限、複数回のスキヤニング考察の結果の一致を強調しているといったほうが妥当だろう。例えば、例(17)では、庭の中に砂や小さな草があっても、例(17)は成り立つだろう。作者が強調したいのは、庭の中にあるのはすべて石だということではなく、最大限、複数回のスキヤニング考察の結果の一致だと考えられる。また、例(14)では、何回スキヤニング考察をしても、スキヤニング考察の対象「名」はすべてとりたてられたのではなく、すべてとりたてられていない。例(17)と同じように、作者が強調したのは、最大限、複数回のスキヤニング考察の結果の一致だと考えられる。

また、従来とりたて用法と呼ばれている「ばかり」の用法の中で、「だけ」と互換できる例文(例えば例10)と互換できない例文(例えば例13)がある。中西(1995)では、「ばかり」のとりたて用法を単機能(例10のような用法)と複機能(例13のような用法)に分け、単機能は「「だけ」と互換性がある、複数性に関与しないもの(一複数個存在/一複数回生起)を自者とする」(p.169)としている。確かに、「この人の病」は複数個存在していない。「この人の病」「病気①」「病気②」「病気③」などが含まれている集合の中から、「この人の病」がとりたてられている。「だけ」のとりたて用法と呼ばれている用法は、このように、集合の中から要素をとりたてる。しかし、「ばかり」の場合、このような、集合から要素をとりたてるデキゴトは、複数回必要である。例えば、例(10)では、医者Aの手で治らない病気は何か、医者Bの手で治らない病気は何か、医者Cの手で治らない病気は何か、あの水で治らない病気は何かなどの課題に対し、複数回スキヤニング考察する必要がある。例(11)では、寄ってくる人が複数いるので、その一人一人に対し、スキヤニング考察する必要がある。例(14)では、その川はどんな川かという課題に対し、視点を変え、何回もスキヤニング考察する必要がある。したがって、「ばかり」のとりたて用法と呼ばれている用法は、実際のモノレベルではなく、スキヤニング考察というデキゴトレベルで、すべて複数性がある。筆者は、中西(1995)で呼ばれている「ばかり」の単機能も、複機能も、一つの用法とする。また、スキヤニング考察は

話し手や聞き手により、瞬時に行われているので、例(10)のような複数回、全く同じスキヤニング考察を行う例文では、「ばかり」は「だけ」と互換できる。一方、例(11)では、スキヤニング考察の過程は、寄ってくる人を一人一人考察するわけで、候補を含む集合から要素をとりたてるわけではない。例(14)では、複数回のスキヤニング考察の結果は同じだが、過程は違う。よって、例(11)や例(14)では、「ばかり」は「だけ」と互換できない。日本語学習者が「ばかり」を使用する時に、以上の「ばかり」と「だけ」の違いが参考になるだろう。

さらに、従来とりたて用法と呼ばれている「ばかり」の用法の中で、例(14)のような、「名」はとりたてられたのではなく、何回スキヤニング考察をしてもすべてとりたてられていない例文もある。したがって、本稿では、従来とりたて用法という呼び方を避け、例(10)～(18)のような用法を「ばかり」の複数性明示用法とする。つまり、スキヤニング考察の対象をとりたてる用法ではなく、スキヤニング考察の複数性を示す用法である。

また、「だけ」と「しか」がスキヤニング考察の対象に限定しているのと違い、「ばかり」はほかの要素を許容できる。つまり、ゆるいとりたてを表しているといえる。例えば、例(11)では、集まっているのは、何十人に一人くらい、尼さんではなく近所の人だとしても、言えるだろう。

先行研究では、例えば定延(2001)では、例(11)のような用法を夾雑物の問題とし、『ばかり』は夾雑物を許容しやすい(定延 2001)と述べている。筆者の「ばかり」の複数性明示用法の定義づけと先行研究の定延(2001)の記述は衝突せず、立場が一致している。

また、以上の用例の中で、例(10)～(12)では、「名詞(句)＋ばかり」は文の中の主語をなしている。例(13)(14)では、「名詞(句)＋ばかり」は文の中の連用修飾成分をなしている。例(15)(16)では、「名詞(句)＋ばかり」は述語をなしている。例(17)(18)では、「名詞(句)＋ばかり」は連体修飾成分をなしている。『新潮文庫 100 冊』CD-ROM 版の用例の中で、「名詞(句)＋ばかり」の「ばかり」が複数性明示用法を表す時、例(10)～(16)のような用例が圧倒的に多い。例(17)(18)のような用例は少ない。つまり、「名詞(句)＋ばかり」の「ばかり」が複数性明示用法を表す時、「名詞(句)＋ばかり」が文の中の主語や述語、連用修飾語成分をなすことが多い。「名詞(句)＋ばかり」が連体修飾成分をなす場合は少ない。つまり、「ばかり」の用法の偏りが激しい。したがって、日本語学習者が「ばかり」を使用する時に、以上の「ばかり」の用法の偏りが参考になるだろう。「ばかり」の複数性明示用法を使用したい時、「名詞(句)＋ばかり」は文の中で、主語や述語、連用修飾語として使用した方がいいだろう。

3.2 数量指示用法

「名詞(句)＋ばかり」の「ばかり」が数量指示用法で使われる場合、以下のような用例が見られる。

(19) 夜具は五布で三人いっしょに寝る規則だが、人数に対して夜具にゆとりがあるため、三人の小頭と栄二、また女衞の六のほか二人ばかりは、めいめい一人で寝ていた。(山本周五郎『さぶ』)

(20) 兵部卿の官もまた、北の方を失われてこの三年ばかりは寂しい独身生活をしていらしたので、熱心に求婚していられた。(田辺聖子『新源氏物語』)

(21) 雪は小止なく、今は雨も交らず乾いた軽いのがさらさらと面を打ち、宵ながら門を鎖した敦賀の通はひっそりして一条二条縦横に、辻の角は広々と、白く積った中を、道の程八町ばかりで、唯ある軒下に辿り着いたのが名指の香取屋。(泉鏡花『高野聖』)

(22) 二分ばかりで、この騒ぎは終わりました。(海外作品エミリー・ブロンテ『嵐が丘』)

(23) 「どのくらゐある？」と石川は節子さんに訊いた。一頁に四首づつで五十頁あるから四五の二百首ばかりだと答へると、(後略)(石川啄木『悲しき玩具』)

(24) あいている場所は三畳ばかりの、まん中にひくいちゃぶ台、それをかこんで、女も入れて三人ですわるともういっばいであった。(石川淳『変化雑載』)

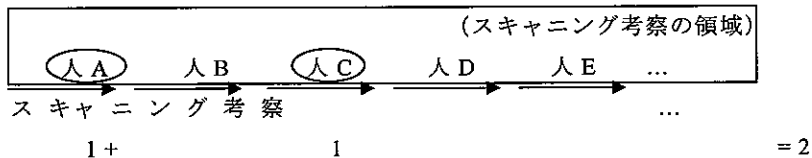
(25) 両国から川をわたって東南の方、四十分ばかりのところこの駅がある。(石川淳『焼跡のイエス・処女懐胎』)

(26) 八千円ばかりはいった折りたたみの財布の中に、小型の女もちの名刺が四五枚、バラにはいていた。(松本清張『点と線』)

例(19)では、「ばかり」のスキヤニング考察の対象は「二人」である。ほかの要素は「三人の小頭と栄二、また女衞の六のほか」の人である。一人で寝ていたのは三人の小頭と栄二、また女衞の六のほか何人か?という課題に対し、スキヤニング考察の領域にあるすべての要素に対し、スキヤニング考察をする。一回スキヤニング考察をしたら、結果は人Aが一人で寝ていた。もう一回スキヤニング考察をしたら、結果は人Bが一人で寝ていなかった。もう一回スキヤニング考察をしたら、結果は人Cが一人で寝ていた。もう一回スキヤニング考察をしたら、結果は人Dが一人で寝ていなかった。このように、何回もスキヤニング考察をし、たどりついた結果は、一人で寝ていたのは人Aと人Cだということである。つまり、何回もスキヤニング考察をし、たどりついた結果は、スキヤニング考察の対象「二人」である。また、スキヤニング考察の対象は数量表現であるからこそ、スキヤニング考察は計算しながら行われる。以下のように表示できる。

図 3

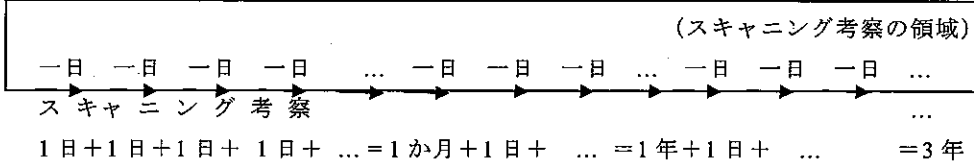
課題：一人で寝ていたのは三人の小頭と栄二、また女衞の六のほか何人か?



例(20)では、「ばかり」のスキヤニング考察の対象は「三年」である。独身生活をしたのはどれくらいか?という課題に対し、スキヤニング考察をする。一回スキヤニング考察をしたら、結果はこの日が独身生活をしていた。もう一回スキヤニング考察をしたら、結果はつぎの日も独身生活をしていた。もう一回スキヤニング考察をしたら、結果はそのつぎの日も独身生活をしていた。何回もスキヤニング考察をした結果は、独身生活をしていたのは「三年」ということである。例(19)と同じように、スキヤニング考察の対象は数量表現であるからこそ、スキヤニング考察は計算しながら行われる。例(21)～(26)も同じである。計算しながらスキヤニング考察をした結果、スキヤニング考察の対象にたどり着く。以下のように表示できる。

図4

課題：独身生活をしたのはどれくらいか？



また、例(23)では、「ばかり」のスキヤニング考察の対象は「二百首」である。「どのくらいある？」との課題に対し、一回スキヤニング考察をしたら、たどり着いた結果は一頁に四首あるということである。もう一回スキヤニング考察をしたら、たどり着いた結果は、次の頁にも四首あるということである。何回もスキヤニングをしたら、たどり着いた結果は全部で五十頁で、一頁に四首ずつの「二百首」である。例文自体が、スキヤニング考察の過程を詳しく示している。

以上のような用法は従来、程度用法または概数量的な用法と呼ばれている。しかし、例(19)(20)でわかるように、「ばかり」が表しているのは程度でも概数量でもなく、はっきり「二人」「三年」と指示している。また、スキヤニング考察をしながら、計算した結果、「二人」「三年」ということにたどり着く。したがって、本稿では、以上のような用例を数量指示用法とする。

また、先行研究では、丸山(2001)では、『ばかり』の場合は、ちょうどその分だけ読んだ場合にも使用する(p.157)と述べている。定延(2003)では、厳密には概数量的ではないと主張している。本研究の数量指示用法の定義づけは、このような先行研究と同じ立場である。

例えば、例(20)では、「ばかり」のスキヤニング考察の対象は「三年」である。実際、時間がちょうど「三年」かどうかについて、スキヤニング考察ではわからない。しかし、例(20)では、「三年一日ばかり」だと不自然である。これは、スキヤニング考察しながら行う計算が精確な計算ではなく、もっとおおざっぱなものだからだと考えられる。つまり、おおざっぱに計算して見れば、「三年」ということにたどり着く。強調したいのは、だいたい三年という概数ではなく、計算しながらスキヤニング考察をした結果「三年」だということである。スキヤニング考察は例文の成り立ちに重要な役割を果たしている。先行研究で、「ばかり」の数量指示用法を、「最適値計算」(井上1993)と「度数算出用法」(定延2003)と呼んでいるのはこのためであろう。

また、以上の用例の中で、例(19)では、「名詞(句)+ばかり」は文の中の主語をなしている。例(20)(21)(22)では、「名詞(句)+ばかり」は文の中の連用修飾成分をなしている。例(23)では、「名詞(句)+ばかり」は述語をなしている。例(24)～(26)では、「名詞(句)+ばかり」は連体修飾成分をなしている。『新潮文庫100冊』CD-ROM版の用例の中で、「名詞(句)+ばかり」の「ばかり」が数量指示用法を表す時、例(24)～(26)のような用例が圧倒的に多い。例(19)～(23)のような用例は少ない。特に、例(21)(22)のような用例は5つしかない。つまり、「ばかり」の用法の偏りが激しい。したがって、日本語学習者が「ばかり」を使用する時に、以上の「ばかり」の用法の偏りが参考になるだろう。「ばかり」の数量指示用法を使用したい時、「名詞(句)+ばかり」は文の中で、連体修飾語として使用した方がいい。また、「ばかり」に前接名詞(句)があるときは数量表現を使用したほ

うがいいだろう。

3.3 「ばかりか」

「名詞(句) + ばかり」の「ばかり」が複数性明示用法を表す場合、以下のような用例が見られる。

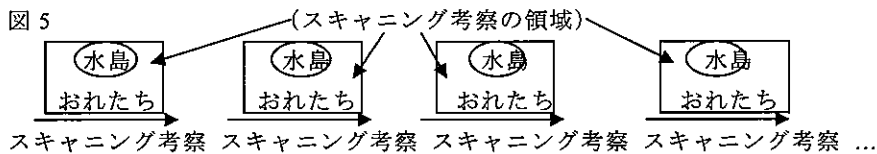
(27) 水島ばかりじゃない。おれたちだって、いつ日本にかえられるか分らないんだぞ。(竹山道雄『ビルマの豎琴』)

(28) 彼の部屋は、あらゆるがらくたの山で整理も何も出来たものではないそうである。部屋ばかりではない。ポケットの中も、紙屑、釘、鍵、ボール紙、小石、魚の骨、貝殻、ライター、勘定書と際限なく溜って来るから、ポケットは、やがて重くなり、ふくれ上り、破れて了う。

(小林秀雄『モオツァルト・無常という事』)

(29) それは収入のためばかりではありません。むしろ収入なんてのは、どっちでもいいことなんですよ。しかしそれにはほかの事情がありましてね。(イブセン『人形の家』)

例(27)では、「ばかり」のスキヤニング考察の対象は「水島」である。ほかの要素は、例えば「おれたち」である。いつ日本に帰れるか分らないのは誰か?という課題に対し、スキヤニング考察をしたら、結果は「水島」にたどり着く。何回スキヤニング考察をしても、結果は「水島」に達する。よって、「ばかり」は複数性明示用法を表しているとして解釈できる。以下のように表示できる。



しかし、「水島ばかり」で明確に排除された「おれたち」は、文の後半に提示されている。このようなことができるのは、「じゃない」という統語的条件があるからである。また、「だって」を用い、一度「ばかり」で排除されたほかの要素をもう一回提示することにより、スキヤニング考察の対象とほかの要素を対比している。結果的に、例(27)では、「ばかり」が表しているのは複数性の明示だが、文全体のスキヤニング考察は以下のようにできる。

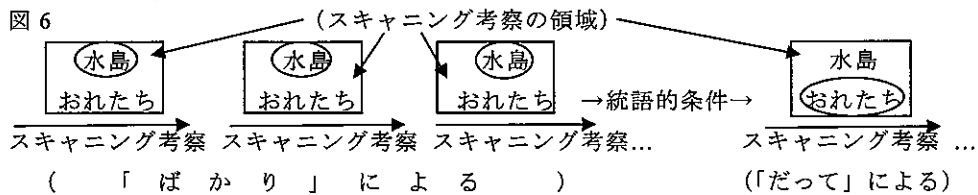


図1、図2と図6で比べてわかるように、図1と図2では、スキヤニング考察が複数回、最大限行われ、たどり着いた結果はすべてスキヤニング考察の対象である。関係のない夾雑物が

入っている、例文の作者が注目したいもの、強調したものはスキヤニング考察の対象だということには変わらない。複数回行われるスキヤニング考察の結果の一致から、「ばかり」の複数性明示用法だといえる。例えば、例(17)では、もし小さい花が一本咲いていたら、スキヤニング考察の結果がすべて「石」ではなくなるが、ほぼ「石」である。「小さい花」は夾雑物として無視できる。一方、図6では、「だって」を用い、一度「ばかり」で排除されたほかの要素「おれたち」をもう一回提示することにより、ほかの要素「おれたち」も注目されるようになった。つまり、「ばかり」によるスキヤニング考察では、いつ日本に帰れるか分らないのは誰か?という課題に対し、何回スキヤニング考察をしても、結果は「おれたち」にたどり着く。

「だって」によるスキヤニング考察では、いつ日本に帰れるか分らないのは誰か?という課題に対し、スキヤニング考察をしたら、結果は「おれたち」にたどり着く。例(27)では、「ばかり」の表す用法は複数性明示用法だが、否定と排除されたほかの要素の提示という二つの統語的条件があるので、文の後半ではほかのことばによるスキヤニング考察が行われている。例(28)、(29)も例(27)と同じである。

また、本稿3.1で述べたように、スキヤニング考察は話し手や聞き手により、瞬時に行われているので、複数回、全く同じスキヤニング考察を行う例文では、「ばかり」は「だけ」と互換できる。例(27)～(29)では、統語的条件が提示されてからの、ほかのことばによるスキヤニング考察は「ばかり」によるスキヤニング考察に影響を及ぼさないで、「ばかり」によるスキヤニング考察は複数回、全く同じように行われている。したがって、例(27)～(29)のような例文では、「ばかり」は「だけ」と置き換えることができる。

また、「名詞(句)+ばかり」について、以下のような用例も見られる。

(30) 絵画ばかりか、文学にまであてはまりますわ、ゾラとかドーデーなどの。(トルストイ『アンナ・カレーニナ』)

(31) 十六章を読めばわかるように、昆虫は殺虫剤に抵抗性をみせるようになり、昆虫ばかりか、おそらくほかの生物の遺伝因子がかわりつつある。(レイチェル・カーソン『沈黙の春』)

例(30)では、スキヤニング考察の対象は「絵画」であり、ほかの要素の一つが「文学」で、複数性明示用法と解釈できる。しかし、例(27)と同じく、「絵画ばかり」で明確に排除された「文学」は、文の後半に提示されている。このようなことができるのは、文の前半に否定または逆接があるからだと考えられる。「か」は従来、疑問を表すといわれる。例(30)において、文の前半では、「か」を使用することで「絵画ばかり」について疑問を投げかけ、文の後半では、「文学にまで」を提示することでスキヤニング考察の対象「絵画」を否定している。よって、例(30)では、「か」は「否定」あるいは「逆接」を示すといえよう。したがって、例(30)の「ばかりか」の「か」が否定または逆接の意味を表しているので、例(30)は例(27)に非常に似ている。例文全体のスキヤニング考察を図で表せば、図6と全く同じ形の図になるだろう。

しかし、例(30)では例(27)と違い、「ばかりか」は「だけか」と置き換えられない。「ばかりか」の表す意味は、「だけか」と全く異なる。よって、本稿では、「ばかりか」を「ばかり」から派生した新しい表現だと考えている。これは先行研究と立場が一致している。また、理由は以下の二つである。一つは、「ばかりか」の用法は、「ばかり」の用例全体の中でごくわずか

ということである。もう一つは、例(27)のような用例では、「ばかり」は「だけ」と置き換えることができるが、類似する例(30)のような用例では、「ばかりか」は「だけか」と置き換えられないことである。すなわち、「ばかりか」は、「ばかり」とは、異なる定型の、別の語彙項目になっている。したがって、本稿では、「ばかりか」を「ばかり」から派生した表現として扱う。

以上の用例の中で、例(27)(28)では、「名詞(句) + ばかり」は文の中の主語をなしている。例(29)では、「名詞(句) + ばかり」は述語をなしている。例(30)(31)では、「名詞(句) + ばかり」は文の中の連用修飾成分をなしている。『新潮文庫 100 冊』CD-ROM 版の用例の中で、以上のような用例はごくわずかである。また、「名詞(句) + ばかり」は文の中で、主語や述語や連用修飾語として使用されるが、連体修飾語として使用されることはない。したがって、日本語学習者が「ばかり」を使用する時に、以上の「ばかり」の用法の偏りが参考になるだろう。「ばかりか」を使用したい時、「名詞(句) + ばかり」は文の中で、主語や述語や連用修飾語として使用したほうが良い。連体修飾語として使用してはいけない。また、必ず統語的条件を使用すべきだと言える。

4. おわりに

以上のように、「名詞(句) + ばかり」の用法を詳しく分析した。まとめてみると、「名詞(句) + ばかり」の用例では、「ばかり」の用法はほぼ複数性明示用法と数量指示用法である。また、「ばかりか」という慣用的な表現を、「ばかり」の派生的用法とした。

複数性明示用法と数量指示用法の共通するところは、スキニング考察という心の中で無意識に行われる行為が重要な役割を果たしていることだ。相違するところは、数量指示用法の場合は計算しながらスキニング考察を行うが、複数性明示用法の場合はそうではない点である。これは、数量指示用法の場合、スキニング考察の対象が数量表現だから生じた違いである。

従来、「ばかり」の用法はとりたて用法、程度用法、アスペクト的用法に大別されるが、その三つの用法の境界や連続性は明確とは言えない。筆者は、「ばかり」の各用法の連続性や違いを明らかにするため、「ばかり」の用法を新たに分類した。また、「ばかり」の本質はスキニング考察の複数性にあると考えている。したがって、スキニング考察の過程や結果の違いによって、「ばかり」の主な用法を分類した。日本語学習者は「ばかり」を使用する時、意識的にスキニング考察を行ってみると、使用したい「ばかり」の用法の特徴がわかるだろう。例えば、「ばかり」の数量指示用法を使用したい時、「ばかり」は数量表現に後接すべきだ。「ばかりか」の用法を使用したい時、排除されたほかの要素の提示という統語的条件などが必要だ。日本語学習者が「ばかり」を使用する時に、以上のことが参考になるだろう。

また、「名詞(句) + ばかり」が文の中で主語、述語、それから連用修飾語をなす時、「ばかり」の用法は強く複数性明示用法に傾く傾向がある。「名詞(句) + ばかり」が文の中で連体修飾成分をなす時、「ばかり」の用法は数量指示用法に傾く傾向がある。したがって、日本語学習者が「ばかり」を使用する時に、以上の「ばかり」の用法の偏りが参考になるだろう。

「ばかり」の複数性明示用法を使用したい時、「名詞(句) + ばかり」は文の中で、主語や述語、連用修飾語として使用した方がよい。「ばかり」の数量指示用法を使用したい時、「名詞(句) + ばかり」は文の中で、連体修飾語として使用した方がよい。また、スキニング考察の対象は数量表現を使用したほうがよいだろう。さらに、「ばかりか」の用法を使用したい時、

「名詞（句）+ばかり」は文の中で、主語や述語や連用修飾語として使用したほうがいい。連体修飾語として使用してはいけない。また、必ず否定を表す統語的条件を使用すべきだと言える。

さらに、「ばかり」と「だけ」の違いにも少し触れた。「だけ」と互換できる「ばかり」の例文では、スキニング考察は複数回、全く同じように行われる。スキニング考察は話し手や聞き手により、瞬時に行われているので、「ばかり」は「だけ」と互換できる。「だけ」と互換できない「ばかり」の例文では、スキニング考察は複数回行われ、結果もすべて同じだが、毎回その過程が違う。日本語学習者が「ばかり」を使用する時に、以上の点が参考になるだろう。

今後は、ほかの品詞に後接する「ばかり」のあらゆる用法についても考察し、すべてを一貫したスキニング考察という観点から新しく分類し、統一的な記述説明を与えたいと考えている。

参考文献

- 庵功雄（2001）「とりたて」『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク
- 井上優（1993）「日本語の『ぼかし表現』をめぐって—文法論からのアプローチ—」『日本学研究』第3号、北京日本学研究中心（編）
- 定延利之（2000）「スキヤニング概念を利用した、現代日本語接尾辞『おき』の曖昧性の統一的説明」『認知科学』7(3)
- 定延利之（2001）「探索と現代日本語の「だけ」「しか」「ばかり」」『日本語文法』1巻1号
- 定延利之（2003）「現代語の限定のとりたて」沼田善子（他）（編）『日本語のとりたて—現代語と歴史的变化・地理的変異』くろしお出版
- 澤田美恵子（2007）『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』くろしお出版
- 中西久美子（1995）「取り立て助詞「ばかり」の限定機能—その複機能と単機能との連続性を中心に—」『大阪大学日本学報』14
- 中西久美子（2001）「単数のものをとりたてる「ばかり」の意味再考—教育の視点から—」『日本語と日本語教育』第30号、慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター
- 仁田義雄ほか（2009）「第9部とりたて」『現代日本語文法5』日本語記述文法研究会編、くろしお出版
- 沼田善子（2000）「とりたて」金水敏（他）『日本語文法2 時・否定と取り立て』岩波書店
- 沼田善子（2009）『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房
- 丸山直子（2001）「副助詞「くらい」「だけ」「ばかり」「まで」の、いわゆる〈程度用法〉と〈とりたて用法〉」『日本文学』95号、東京女子大学日本文学研究会
- 宮田幸一（1948）『日本語文法の輪郭』三省堂
- 張培（2011）「現代語ダケの諸用法について—『形容詞・形容動詞＋ダケ』を中心に」『名古屋大学人文科学科学研究』第40号
- 朱琳（2013）「現代語『ばかり』の用法の多様性について—動詞（句）＋ばかりを中心に—」『名古屋言語研究』Vol.7
- 『現代日本語コース中級Ⅱ』（1990）（名古屋大学日本語教育研究グループ）
- 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（2001）（庵功雄、高梨信乃、中西久美子、山田敏弘著）

用例出典

『新潮文庫の100冊』CD-ROM版